

国語科より

【古文 $\alpha \cdot \alpha 1 \cdot \beta$ (高1もしくは高2 (新高3))】

1. ご用意いただくものと配付するもの

① 予め用意して **Gnoble** の授業に持参すべきもの

□ 授業の解説をメモするための道具: ルーズリーフ・大きめのサイズの付箋

授業内で入試問題を解説します。テキストの本文内に直接書き込む生徒が多いですが、文学史や文法事項などを多くメモする回がありますので、自分にとって使いやすいものを用意しましょう。

□ プリント(小テスト・復習プリントなど)を整理・保管するためのもの

: ノート(余裕を持って貼るには A4 サイズが便利)・バインダー・クリアブックなど

□ 筆記具: 鉛筆、シャープペンシル、消しゴム、ペン、マーカーなど、お好みのもの

授業の板書をそのままの色で写すためには、蛍光ペン(黄色)、ピンク・オレンジ・青・緑のペンが必要ですが、全てを合わせる必要はありません。

□ 辞書: 古語辞典(電子辞書やスマートフォンのアプリ・サイトの利用も可)

授業中には使用しません。宿題実施・復習の補助としてのみ必要です。

② **Gnoble** の授業内で配付されるもの

□ 通常授業テキスト: 3 学期 1 回目の授業内で配付 (β クラスは順次プリント配布)

□ 古文単語帳: 4 月 1 回目の授業内で配付(年度途中合流者は合流時配付)

□ 復習小テスト: 各回の授業冒頭で配付、基本的な文法事項や単語の確認

□ 授業定着プリント: 授業で扱った長文の現代語訳や文法事項の確認(復習時に利用)

2. 授業の進み方と日々の取り組み

① 授業の進み方

▼ 古文 $\alpha \cdot \alpha 1 \cdot \beta$ の授業の流れ

3 学期には基礎知識確認の小テストと応用的な入試問題演習を行っています。各担当により、順序に多少違いはありますが、概ね以下のように進みます。

復習小テスト⇒前週提出の入試演習(または読解演習)の返却と解説⇒古文単語⇒

宿題解説⇒入試演習・提出

▼ 古文 $\alpha \cdot \alpha 1$ の授業を受けるに当たっての流れ

- プリントは裏表に 2 回同じ内容が印刷されています。テキストの入試問題本文も 2 回印刷されています。授業中はプリント・テキストに直接メモを書き込み、2 つ目の本文はきれいなまま取っておきましょう。
- メモを取る際は、結論だけでなく考える過程もできるだけ詳しく記録するようにしてください。
- やむを得ず欠席する場合には、「映像授業」サイトで教材のダウンロード・演習・動画視聴を必ず行うようにしてください。

② 日々の取り組み

▼ 宿題と復習

▽ 古文 $\alpha \cdot \alpha 1 \cdot \beta$ の宿題

$\alpha \cdot \alpha 1$ のレベルに応じ、ぜひ挑戦してほしい入試問題を宿題にしています。20～40 分ほど時間を見込んでください。辞書・文法書は用いずに取り組みましょう(見るとしても、最後の最後に、気になる部分を確認する程度にしましょう)。多少時間をかけてでも、自分なりの解答を追求する姿勢が、初見の古文を読めるようにするために欠かせません。

なお、 β クラスは1月度まで文章読解演習を実施します。

▽古文 $\alpha \cdot \alpha 1$ の復習

古文 $\alpha \cdot \alpha 1 \cdot \beta$ のクラスはこの3学期、すでに高度な入試問題演習に取り組む時期に入っています。学校の授業、あるいは、**Gnoble** の G・E タームでは、時間をかけて細かく品詞分解を行って精読しますが、入試問題を解く際には、ある程度の速さで長い文章に取り組まなくてはなりません。しかも、東大や京大、早稲田大の問題では、古文そのものを読んだその先の深い読解問題もあります。

このタームから合流する生徒はもちろん、以前から参加している生徒にとっても、壁を感じる部分もあるでしょう。

そういうときこそ復習が欠かせません。解説を受けて理解できた文章を徹底的に自分のものにすることが、長文に強くなる近道です。復習を大切にしましょう。

古文の復習は、以下の3段階の方法を提案します。

①簡単な復習

授業を集中して聞いていれば、授業を受けた日の寝る前、翌週の授業開始前の時間などに、「復習用の本文」(テキスト内にもう一度印刷されている本文、書き込みがない状態)を眺めるだけでも十分に意味があります。「あれっ、この部分は何だったっけ?」と感じた部分に付箋を貼るなどしながら読み返し、授業中の書き込みを見て疑問点を解決します。このとき1回音読しておく、単語や文節の区切り目などが意識化されて、より良いでしょう。

②腰を据えた復習

まとまった時間(30 分～1 時間)を取れるときに頭から文章を読み返し、「“已然形+ば”だから“ので”」「尊敬語が付いているから姫宮の動作」など、文脈とその根拠になる文法・単語を確認していきましょう。つまりいたところは、配付される訳と照らし合わせてください。合わせて、

①定着プリントに付いている復習問題に取り組む

②単語を書き出す

③単語や文法のポイントが集まっている文を書き出し、品詞分解や訳をまとめる

などの復習にも取り組みましょう。この過程で不明点が出てくれば、メールや授業前後の時間で担当に質問するようにしてください。

全ての疑問点を解決できたら、頭から音読するようにしましょう。1 回目は不明点が本当にないかの確認を兼ねて、2 回目以降は内容を理解しながら心を込めて読んでみてください。現代部の物語のように心を込めて読めるようになっていけば、理解できたというサインです。

③解き直し・読み直し

1ヶ月ほど時間を空け、解き直しをするのもいいでしょう。ただし、単にもう一回答えを書いて終わりにせず、根拠を心の中で言語化したり、心を込めての音読ができるか改めて試したりするようにしてください。

(参考資料) 受験科目「国語」の特質と長期的展望の必要性

大学受験の一科目として「国語」を見たとき、注意しなくてはならない点は、大学により求められる力が大いに異なるということです。そもそも、国語が受験科目に存在するかどうかということ自体、大学によって差があります。

たとえば、国立理系志望の生徒の場合ですと、

- ・東大……………理系でも二次試験まで必要
- ・東工大……………二次試験、国語無し。共通テストでは受験するが、最終合否判定における共通テストの重要性が著しく低い
- ・国立医学部…二次試験に国語があるところは東大・京大など限られるが、共通テストで高得点が必要である

というように、志望校によって国語の必要状況に差があることが分かります。

同じように、現代文・古文・漢文という3つの区分に関しても、選択問題・記述問題という形式に関しても、どこまでの学習が必要であるかは大学によって異なっています。私立文系の大学では、学部・学科ごとに出题範囲・形式が違うこともしばしばです。受験技術的な話ばかりするのは我々も好きではありませんが、国語の受験勉強に関しては、志望校が固まり次第、受験科目として国語がどのよう
に必要であるかを調べるのが相当に重要です。配点等を調べると同時に、実際に解かなくて構わないので、早いうちに過去問を見てみることを推奨します。

こうした入試制度に鑑みた上で、グノーブル国語科では、高校生活3年間の国語学習に関して、以下のような学習スケジュールを提案しています。

(中3…古文入門〔冬期講習〕・現代文入門〔3学期〕)

高1…古文〔春期講習からの通年講座、1年間完結〕

高2…現代文〔春～12月〕(文系、東大・京大志望の理系の方向け)

古文(高1で未履修の者)〔春期からの通年講座、1年間(もしくは春～12月)完結〕

※高1・高2の夏期講習と冬期講習に「漢文」開講(どこかで1回受講する)、それを踏まえた長文演習講座として新高3(高2)の1～2月に「漢文特別講座」開講

※新高3(高2)の1～2月に「古文特別講座」(高1・2で未履修の者向け速習講座)開講

高3…志望校別の対策〔春期講習から直前講習で完結〕

東大国語、難関国語、私大国語、小論文・医学部小論文

※難関国語は京大・一橋大・阪大・東北大・筑波大・お茶の水女子大など、2次試験に記述の国語を課される大学を受験する生徒向けの講座

※私大国語は早稲田大・上智大・明治大・立教大などの文系学部を受験する生徒向けの講座

※4月の入室テストで不合格の生徒は4～7月開講の基礎力強化講座「受験国語基礎」にご案内

※夏期講習と冬期講習に「共通テスト国語」開講

学校で、理科・社会の範囲履修があまり進んでいない高1のうちに、通年で「古文」を受講し、古文の学力を完成させるスケジュールが理想的だと考えています。そうすれば、高2の間に、現代文の実戦演習や理科や社会の勉強に着手する余裕ができ、現役合格の可能性が高まります。

いずれにせよ、高3になって慌てて古文の学習に手を着けるようでは、十分な学習時間を確保しにくく、成績を上げるのもなかなか難しい、という事実はお伝えしなくてはなりません。どのような方法で勉強するにせよ、入試に国語が関わる(関わりそうな)場合は、高2までに古文(漢文を使用する場合は、漢文も)の基礎学力を身に付けることを前提にお考えいただければと存じます。